

意味論の方法

— 会計記号論からの一提言 —

大西新吾

(2021年3月1日受理)

A Method of Semantics

— A Suggestion Made by Accounting Semiotics —

Shingo ONISHI

要旨：会計を（言語を含む）広く「記号」の一つとみて、＜意味とは何か＞という古くて新しい問題に対し、＜意味場＞に焦点を当て、会計記号論の立場から意味研究の方法について考察を試みた。会計は、ある企業におけるある商品と貨幣との交換の場面を「取引」ととらえ、そこでの取引金額（貨幣金額）を語るというかたちで表現する。ここで、貨幣の＜価値（意味）＞が「交換価格」（取引金額）であるとするならば、会計はその取引金額としての＜価値＞を「勘定科目」を用いて語っていることになる。このような見方からすると、「勘定科目」のリストは（会計という「言語記号」圏で経済行為と結びつく）＜意味＞（あるいは＜意味素＞）のリストとみることができる。そして、そのように考えることが可能であるならば、ここに、我々は、会計（記録）によって、＜意味＞のリストを手に入れたことになる。そこで、会計意味論の新解釈として、会計記録から「金額」を捨象し（評価・測定はいったん考察の対象から外し）、「勘定科目」の＜意味＞に注目して考察を進めることを「会計意味論」の研究領域の一つに加えることにした。会計意味論が＜意味＞を直接扱うことができることで、ここでの考察方法が、他の学問領域の意味研究に貢献することが期待される。

Key words：意味 価値 (valeur) 意味場 (semantic field) 意味のリスト 格関係 意味空間 意味の骨格

1. はじめに

世界には多様な言語が存在し、そのなかで人間は互いに意思疎通（コミュニケーション）を図りながら調和を保っている。会計もグローバルなビジネス社会における一種の「言語」とされる。

本稿の目的は、会計を（言語を含む）広く「記号」の一つとみて、＜意味とは何か＞という古くて新しい問題¹⁾に対し、＜意味場＞に焦点を当て、会計記号論の立場から意味研究の方法について考察を試みることである。なお、本研究は、人間が＜意味づけ＞をするメカニズム（人間の認識の基底構造）の探求の一途上にある。

2. 意味研究の動機

＜利益＞とは何か。＜意味（価値）＞とは何か。

一般に、会計は企業に関わる財（対象物）の動きを貨幣金額で測定あるいは評価し、その測定値（評価値）をもとに＜利益＞という値を算出する行為、すなわち一種の物理現象を描出するシステムとされる。では、会計を「言語」と同様に一種の人文社会現象を描出するコミュニケーションシステムとみるとどのような考察が可能になるであろうか。「会計は、経済的価値以外の＜価値＞も併せて表現しているのではないか。」「そうした見方をする場合、＜資産＞・＜負債＞・＜純資産＞・＜収益＞・＜費用＞という会計上の五つの概念を＜最高類＞のものとしてとらえてよいか。」こうした素朴な疑問を動機としてこれまで会計記号論という領域で意味研究を進めてきた。

3. 会計意味論

(1) 従来の会計意味論

〈意味〉の問題は意味論という学問領域で扱われるが、さまざまな学問分野にそれぞれの意味論があり、したがってまた、それぞれの研究対象や研究方法がある²⁾。従来の会計意味論³⁾は、「勘定」とその対象との間の関係を問うものとして、「勘定」に金額を付すこと、すなわち、評価論・測定論をその研究領域としてきた。しかし、実際に会計記録を行うにあたっては、「勘定」に金額を付す以前に、記帳者は取引を「科目」で識別（意味づけ）している。ここに、会計意味論の別の解釈（研究方法）の可能性が生じてくる。

(2) 新解釈

記号論の創始者のひとりとしてされる、ソシュールによる比喩の一つに、貨幣を作る素材が貨幣の価値を決定するものではないという、記号の非有形的性質に基づく言語と貨幣のアナロジーがある。ソシュール、山内貴美夫訳 [1971/1974] (41頁) では、言語の〈価値 (valeur)〉は〈素材にない=無体的である〉こと、言語は〈貨幣〉に類比できることが主張されている。

言語は〈貨幣〉に類比できるとして、では、ことばの〈意味 (価値)〉は貨幣に類比して考えるとどうなるのであろうか。まず、貨幣の〈価値〉は、その貨幣の素材そのものではなく、(その貨幣共同体内部での) ある商品 (サービスや他通貨を含む) との交換に反映された「交換価格」(取引金額) とみることができる (共同体内部での貨幣とそれ以外のものとの相互規定)。このことは、「商品の価値とは必然的に価値体系の中での1つの価値にすぎず、1つの市場の需給関係が変化すればそれは同時にすべての商品の価値を変化させてしまうことになる」(岩井 [1993/1998] 32頁) という古典派経済学の知見が、ソシュールの〈価値〉という用語法に直接影響しているとされる点にも求めることができる。

翻って、会計は、ある企業におけるある商品と貨幣との交換の場面を「取引」ととらえ、そこでの取引金額 (貨幣金額) を語るというかたちで表現する。

ここで、貨幣の〈価値 (意味)〉が「交換価格」(取引金額) であるとするならば、会計はその取引金額としての〈価値〉を「勘定科目」を用いて語っていることになる。このような見方からすると、「勘定科目」のリストは (会計という「言語記号」圏で経済行為と結びつく) 〈意味〉 (あるいは〈意味素〉) のリストとみることができる。そして、そのように考えることが可能であるならば、ここに、我々は、会計 (記録) によって、〈意味〉のリストを手に入れたことになる。

そこで、会計意味論の新解釈として、会計記録から「金額」を捨象し (評価・測定はいったん考察の対象から外し)、「勘定科目」の〈意味〉に注目して考察を進めることを「会計意味論」の研究領域の一つに加えることにした。

4. 「勘定科目」の〈意味〉の探求

(1) 新解釈のもとでの考察例

新解釈のもと考察を進めるにあたりまず、考えられることは、貨幣の〈価値〉が体系内における他の商品との関係において決まるのであるとすれば、取引金額の〈意味〉としての「勘定科目」についても、ある「勘定科目」とそれに隣接する他の「勘定科目」との関係を考察することで、〈意味〉とは何かという問いに対する手掛かりが見つかるのではないかと、ということである。そこで筆者は以前、「勘定科目」間の〈依存関係〉の考察を試みたことがある (大西 [2004a])。ここで〈依存関係〉とは、〈一方依存〉・〈相互依存〉・〈相互無依存〉の三つをいい、ある取引を表現する仕訳の借方科目と貸方科目を入れ替えても仕訳が成立する場合、両科目を〈相互依存〉関係にあるとし、ある仕訳の借方科目と貸方科目を入れ替えると、仕訳が成立しない場合、両科目の関係を〈一方依存〉関係にあると見るものである。〈相互無依存〉の場合は、そもそも両科目を使った仕訳は成立しないとするものである。考察の整理のために、数学のグラフ理論を援用し、コンピュータ化学を参考にしながら、「勘定科目」間の〈依存関係〉図の作成を試みた (大西 [2004b])。こうした考察の反省として、〈依存関係〉の判断基準をいつのまにか、

具体的（物理的）対象物の動きに合わせて考えてしまい（『時間』を判断基準にしていた）、純粹に＜意味＞関係を考察できたかが明確ではないため、この考察には再考の余地が残されている。

また筆者は以前、取引を表現する「仕訳」と「仕訳」のあいだの関係を考察するために、数学の群論を参考に＜仕訳間の関係＞を対称性群でとらえる考察を試みたことがある。取引の発生から消滅（完了）までを一つのまとまりとして、その中で、「勘定科目」間の関係をみようとすると考察である。この考察は、一つの仕訳を「文」とみて、「文」と「文」の関係をみるものともいえる（大西 [2009]）。この考察では、仕訳「文」の展開とアーサー・ケーリーのケーリー表との関連性は確認できたが、いつのまにか、「勘定科目」の＜意味＞からいったん離れる結果となった。この考察にも再考の余地が残されている。

その他、新解釈の下でのありうる考察として、言語学の「成分分析」の方法を用いて、「勘定科目」という語彙素の意味成分（意義素）を考察することが可能である。この考察は、個別の領域として考察することもできるが、後述する＜意味のまとまり＞＝＜意味場＞のなかで考察することも可能である。

(2) 再考

当初の目的である「勘定科目」の＜意味＞から離れてしまった反省から、考察の原点に立ち返り、＜意味＞を＜意味のまとまり＞＝＜意味場 (semantic field)＞でとらえて考察を試みることにした。

すなわち、仕訳を一つの「文」＝＜意味場＞ととらえ、「勘定科目」を文を構成する要素とみて、「勘定科目」間の＜関係＞を＜意味＞（あるいは＜意味素＞）の関係として再考することにした（大西 [2014]）。まず、一企業で取引を記録する「勘定科目」の数は、企業の規模にもよるが、90個から110個程度に収まることに気が付いた。また、一つの仕訳で用いられる「勘定科目」の数は最少で2個（2個ないと仕訳が成立しない）、多くても4個から6個であることに気づいた。そこで仕訳「文」の＜かたち＞に注目し、「勘定科目」の種類を無視するためにすべての科目を○でとらえ、仕訳文中の「金額」・

「日付」・「位置（借方・貸方）」を捨象して、これを行列形式で表現してみた。この考察により、12個～15個の仕訳「文」の＜かたち＞の型（パターン）が得られた。

次に、この＜かたち＞を背後で支えているものは何か、考えることにした。すなわち、なぜ＜かたち＞の型に限られるのか（有限性）ということと、どうしてこのようなくかたちになるのか（特殊性）という考察が必要となった（大西 [2017]）。

カタストロフィー理論で有名な数学者のルネ・トムによると、世界には、英語、フランス語、ドイツ語をはじめ実に多様な言語があるが、どの言語においても、一つの文（動詞が一つ）の構成要素は4個以内に収まるとい⁴⁾。仕訳「文」の＜かたち＞が成立した取引金額の形態を表している（意味している）とみるならば、意味のまとまりとしての＜かたち＞は＜価値の形態＞あるいは＜意味の骨格＞といえる可能性がある。

そこで次に、言語学者であり記号学者でもあるイエラムスレウの格のカテゴリーの考察を参照した（大西 [2018]）。格 (case) はすべての言語現象にあるものであり、私たちの空間知覚の図式は格関係にもとづいていとされる。具体的には、格は名詞に付随していると捉えることができる。そこで、「勘定科目」を名詞とみて、名詞の背後にある（隠れて見えない）「格」という現象に注目することにした。具体的には、各「勘定科目」は＜近づく・とどまる・離れる＞という空間関係の網（＝＜意味場＞）を表現する機能を背後に持つという前提のもと、考察を進めていった。これは、「勘定科目」と「勘定科目」の＜あいだ＞の関係は、格関係により構成されているという考えに立っている。

ところで、格関係の考察は、イエラムスレウ以降では、言語学においては、代表的なものとして、フィルモアによる格文法の考察があるが、言語においては＜意味＞の範囲が広すぎて研究者ごとに意味格が異なるという欠点があることから⁵⁾、現在においても研究途上にある。しかし、会計という領域においては、「勘定科目」の数は限られており、つまり、＜意味＞の範囲が限定的であるから、＜意味の骨格＞の

一つのサンプルを提示するには都合がいい。考察から、暫定的に、12個の格関係（＝＜意味の骨格＞）を抽出した（大西 [2018]）。

(3) 展 開

新解釈の会計意味論における次なる展開として、「金額」が記載される＜場所＞、および、その＜場所＞で発生（記載）し・消滅（抹消）する「金額」の移動に注目した考察が考えられる。まず、「金額」が記載される＜場所＞としては、通貨そのものに記載される、いわゆる額面上という＜場所＞がある。この通貨上の数字（金額）を仮に0次元とみる。当然ながら、この数字は、企業が定めたものではないが、この数字は、企業が通貨を受け取ったときに当該企業の帳簿上（例えば「現金出納帳」）の＜場所＞に記載される。この記載を仮に1次元とみる。同様に、「金額」が記載される＜場所＞として、通貨そのものではないが、小切手や手形や株式等の有価証券上がある。これも仮に0次元とみたくて、帳簿上に記載した時点で次元を与えることにする。「金額」が記載される＜場所＞としては他に何かあるであろうか。思い浮かぶものとして、納品書、請求書、領収書などの各種の証票上がある。また、預金口座の通帳上など、社外で記録されるものもある。

証票上の数字や通帳上の数字は、そのままでは、売買に使われることはないが、そこに「金額」は記載され、また、別の記録メディアに移動する。こうして、「金額」（の移動）が記載される＜場所＞について、階層性を意識した次元による整理が考えられる。各「勘定科目」は仕訳「文」の中で、これらの階層性をもった＜場所＞と＜場所＞をつないでいる。格関係でいうと、「金額」の＜意味＞としての各「勘定科目」は＜近づく・止まる・離れる＞という空間関係の網（＝＜意味場＞）を表現する機能を背後に持ち、意味空間を構成することになる。

また、それぞれの帳簿書類等には記帳担当者がある。会計の記録を行うということは、人と人、部署と部署、組織と組織、それぞれの＜あいだ＞を証票等のメッセージのやり取りをとおして、つないでいることになる。階層性をもった＜場所＞があり、

一つの＜場所＞の内部で、あるいはまた、外部の＜場所＞とのあいだでメッセージのやりとりがつくるネットワークがある。これらが、現実的な記号活動であり、意味現象をつくっている。その意味現象を「勘定科目」が表現している。人間の空間認知の図式がここにある。経済的価値以外の＜価値＞がここに垣間見られる。

5. おわりに

ここまで、言語学、哲学、記号学等で研究されてきた＜意味＞について、会計記号論の立場から意味研究のためのひとつの道具立て（方法）を提言する目的で考察を進めてきた。

記号とは「何かの代わりにするなにか」であり、代替性は交換性に置換できる。交換（代替）を繰り返しながらネットワークが形成され、コミュニティが形成されていく。

会計学（会計記号論）の立場から、意味研究の方法について次のような提言ができる。

- ①主体（主観）を基体としてそれが客体（客観）を観察するという立場で＜意味（価値）＞を研究する方法もある（会計構造論では＜対象理論＞という。）が、＜場所（トポス）＞を基体として＜意味（価値）＞を研究する方法もある。
- ②会計では、＜意味場＞としての取引記録が限定的である（記録時に使用することは「勘定科目」の数に限りがあり、「勘定科目」を用いての取引記録である仕訳「文」にも一定の組み合わせがある）。したがって、＜意味＞（あるいは＜意味素＞）のリストとしての「勘定科目」のリストを整理し、会計における＜意味の形態＞あるいは＜意味の骨格＞のパターンを提示することで、会計意味論の新解釈の考察は、他の学問領域の意味研究に貢献することが期待される。特に、＜依存関係＞の考察方法や格関係の考察方法は他の学問領域の意味研究に資すると考えられる。

また、会計学研究においても、経済的価値＝＜利益＞以外の＜価値＞に注目した、非ユークリッド

幾何学的な「〈場所〉の会計学」あるいは「〈かたち〉の会計学」の誕生が期待される。そのためには、素朴な疑問として研究の動機にもなっている、(ア)〈利益〉は差額(差異)概念なのか、関係の束の〈かたち〉の見方の一つにすぎないのか。後者の場合だとすると、(イ)「金額」の大きさ(差額の大小)ではなく〈かたち〉の違いに注目した別の表現の仕方はないのか。さらに、(ウ)国あるいは地域によって〈かたち〉の違いはあるのか。もしあるとすれば、それは〈文化〉の違いからきているのか。逆に、もし国や地域によって〈かたち〉の違いがないとしたら、会計は世界の「共通言語」といえるのか。こうした点について、検討していく必要がある。そして、そうした検討の延長線上に、〈かたち〉の変化に注目し、企業の倒産を未然に防ぐ「予防会計学」の誕生も期待されることになる。

そのためにも、〈交換〉が人間の認識にとってインネイト・カテゴリーの一つなのか、また、会計意味論の考察から取り出す〈意味の骨格〉あるいは〈意味素(セマンティック・プリミティブ)〉が他の記号分析において本当に有効なのか、引き続き研究を続ける必要がある。

付記

本稿は、2020年8月30日に京都大学で開催(オンディマンド)された国際会計研究学会第37回研究大会(全国大会)での自由論題報告をもとにしている。

註

- 1) この点については、例えば、フランソワ・レカナティ [2006] を参照されたい。著者はヨーロッパの分析哲学学会の元会長で、著書では、分析哲学・言語哲学の各派対立のなかで意味の問題の解決を試みた経緯が述べられているが、結果的には意味の問題については各論併記的で決定打がないと思われる。
- 2) この点については、例えば、池上 [1975/1993] を参照されたい。
- 3) この点については例えば青柳 [1991] (39-41頁) や笠井 [1994] (63頁) を参照されたい。
- 4) この点については、野崎 [1974] (39-41頁) を参照されたい。
- 5) この点については、立川 [1995] (96頁) を参照されたい。

参考文献

1. Hjelmslev, L. [1935], *La catégorie de cas. Étude de grammaire*

1. *générale. Première Partie. Acta Jutlandica*, 7: 1. [1937] *Deuxième partie. Acta Jutlandica*, 9: 2., Universitetsforlaget i Aarhus.
2. ——— [1943], *Omkering Sprogteoriens Grundlaeggelse*, Munksgaard. (ルイ・イエエルムスレウ, 竹内孝次訳 [1985] 『言語理論の確立をめぐる』, 岩波書店 [English trans. by F.J. Whitfield [1953], *Prolegomena to a Theory of Language*, University of Wisconsin Press. (Indiana University publications in anthropology and linguistics, Memoir 7 of the *International Journal of American linguistics*, Supplement to Vol.19, No.1, pp.iv+92) (ルイス・イエエルムスレウ, 林栄一訳述 [1959] 『世界言語学名著選集第6巻 言語理論序説 [英語学ライブラリー 41]』, ゆまに書房。)
3. Saussure, F. de [1916], *Cours de linguistique, générale*, Paris., 小林英夫 [1972/1997] 『ソシュール 一般言語学講義』 改訂版, 岩波書店。
4. 青柳文司 [1991] 『会計学の基礎』, 中央経済社。
5. 池上嘉彦 [1975/1993] 『意味論』, 大修館書店。
6. 井尻雄士 [1968] 『会計測定の基礎』, 東洋経済新報社。
7. 泉井久之助 [1967] 『言語の構造』, 紀伊國屋書店。
8. 泉谷勝美 [1997] 『スンマへの径』, 森山書店。
9. 岩井克人 [1993/1998] 『貨幣論』, 筑摩書房。
10. 上田昇 [2017] 「語の同一性について—アポーハ論の視点から」『人文学研究』, 第13号, 243-267頁, 目白大学。
11. 大西新吾 [2004a] 「会計基礎論における勘定科目の時空—『勘定科目の周期表』作成のためのプロレゴメナー」『三田商学研究』 第47巻第1号, 109-125頁, 慶応義塾大学商学会。
12. ——— [2004b] 「会計記号体系内における『勘定』の意味関係 —イエエルムスレウの〈依存関係〉を手がかりとして—」『會計』 第166巻第3号, 60-73頁, 森山書店。
13. ——— [2009] 「会計と対称性」『笠井昭次先生古稀記念論文集 (笠井昭次先生古稀記念論作集第2巻)』, 29-47頁, 慶應義塾大学出版会 (私家版)。
14. ——— [2014] 「会計表現の『かたち』と意味—会計記号論の方途—」『人間学研究』 中部人間学会, 第12号, 29-35頁。
15. ——— [2017] 「会計記号の絵画性—道具と操作—」『仁愛女子短期大学研究紀要』 第49号, 7-14頁。
16. ——— [2018] 「会計記号の格関係にかんする一試論」『仁愛女子短期大学研究紀要』 第50号, 11-19頁。
17. ——— [2019] 「会計表現の意味構造—人間の認識の基底構造の探求」橋本尚編著『現代会計の基礎と展開』, 445-457頁, 同文館出版。
18. 笠井昭次 [1994] 『会計構造の論理』 改訂版, 税務経理協会。
19. 北岡一道 [1989] 「伝達動詞〈say〉の間接目的構文」『外国語・外国文学研究』 12, 99-111頁, 大阪外国語大学。
20. 木村敏 [1988] 『あいだ』, 弘文堂。
21. 国廣哲彌 [1996] 『意味論の方法』, 大修館書店。
22. 小泉保 [2007] 『日本語の格と文型—結合価理論にもとづく新提案』, 大修館書店。
23. ソシュール, 山内貴美夫訳 [1971/1974] 『ソシュール 言語学序説』, 勁草書房。
24. 田中茂次 [1995] 『会計言語の構造』, 森山書店。
25. 立川健二 [1995a] 「言語のなかの主体」『月刊言語』 2月号, Vol.24, No.2, 102-107頁, 大修館書店。
26. ——— [1995b] 「『イエエルムスレウ』再入門③—格とはなにか」『月刊言語』, Vol.24, No.3, 94-99頁, 大修館書店。
27. ——— [1996] 「デカルトからイエエルムスレウへ—特集デカルト派言語学を超えて—」『月刊言語』, Vol.25, No.4,

- 20-27頁, 大修館書店。
28. 辻 幸夫 [2002]「格と認識の基盤」『月刊言語』第31巻第4号, 36-37頁, 大修館書店。
 29. 中村雄二郎 [1988]『場所』, 弘文堂。
 30. 西田幾多郎 [1987]『西田幾多郎哲学論集 I 場所・私と汝』, 岩波書店。
 31. 野崎昭弘 [1974]「トポロジーと言語理論—ルネ・トムの言語理論」『月刊言語』第3巻第5号, 38-45頁, 大修館書店。
 32. 松村一登 [1993]「『格』と認識」月刊『言語』, Vol.22-10, 69-70頁, 大修館書店。
 33. 丸山圭三郎 [1981]『ソシュールの思想』岩波書店。
 34. フランソワ・レカナティ [2006]『ことばの意味とは何か—字義主義からコンテクスト主義へ』, 新曜社。
 35. 山梨正明 [2004]『ことばの認知空間』, 開拓社。
 36. R.トム, E.C.ジーマン, 宇敷重広, 佐和隆光 [1995]『形態と構造—カタストロフの理論—』, みすず書房。
 37. 和辻哲郎 [1991]『風土—人間学的考察—』, 岩波書店。